

埋め立て前の榕城湾の城ノ浜で火縄銃試射の光景を流したテレビ番組があり、人だかりの中心に、自ら撃った銃の轟音と反動に破顔一笑するヒゲのアッキー様の姿がありました。島主種子島家の28代時望氏の弟種子島時哲（ときあき）氏です。

私の小学生時代、東町のホテルニュー種子島のあたりに西之表市立図書館があり、アッキー様が館長でした。当時、アイヌをテーマにした映画「コタンの口笛」が島でも上映されらしく大人たちが話題にしていたことから、原作の本を借りたのを覚えています。

今年、週刊朝日が10月下旬から3号連続で司馬遼太郎の「街道をゆく 種子島みち」を掲載し、挿絵に古武士然としたアッキー様が登場します。

半世紀前の取材で来島した司馬さんを囲んだ宴の記念写真が赤尾木城文化伝承館「月窓亭」に掲げられています。当時の市長井元正流、種子島家29代時邦、郷土史家平山武章の各氏らが同席したそうです。このとき同行した薩摩焼の沈寿官氏が妙円寺詣りの長い歌を披露した後、アッキー様が立ち上がり、尺八を刀の代わりに差して「そもそも、身共は薩州鹿児島一ツちの豪傑」と室町狂言のような身ぶりでおどけはじめたと「種子島みち」に書かれています。「さかだのきじろ」という化け物退治のひとり狂言でした。

深山の古寺に出没する妖怪を退治しに出かけたが、八尺有余の相手を前になかなわぬとみて、いのちを捨てては不孝、不忠になると「そこで持ったる大小がらりと投げ捨て 本国さしてぞ逃げかえる」と退場します。

アッキー様は翌日、司馬一行を栖林神社と種子島家墓地、城跡（旧榕城中学校）と祢寝戦争の合戦場などに案内しました。日本最南端の武家社会の歴史について、私もすっかり伝えていきたいと思えます。



司馬遼太郎と懇談するアッキー様（右から三人目）
＝ 1975年撮影（月窓亭所蔵）